

釧路湿原の周辺地域におけるウラジロタデ [*Pleuropteropyrum weyrichii* (Fr. Schm.) H.Gross (Polygonaceae)] の分布

高 嶋 八千代*

Distribution of *Pleuropteropyrum weyrichii* (Fr. Schm.) H. Gross
(Polygonaceae) around the Kushiro marsh in Eastern Hokkaido

Yachiyo TAKASHIMA*

はじめに

ウラジロタデはその名のように、葉の裏一面に白い綿毛を密生して白く見えるタデ科の多年草である。

国立公園や国定公園には「自然公園法の規定により国立公園及び国定公園ごとにその特別地域内において許可を受けなければ採取し、又は損傷してはならない高山植物その他これに類する植物」として指定されている植物がある。ウラジロタデは日本の28個所の国立公園のうち利尻礼文サロベツ、知床、阿寒、大雪山、支笏洞爺、十和田八幡平、日光、上信越高原、中部山岳の9国立公園と54国定公園のうちニセコ積丹小樽海岸、日高山脈襟裳、

大沼、津軽、越後三山只見の5国定公園で指定植物とされている。

北海道でウラジロタデが指定植物となっている利尻礼文サロベツ、知床、阿寒、大雪山、支笏洞爺の5国立公園での指定理由は崩壊性砂礫地（高山帯の雪崩斜面、海岸の風衝地等の風化した不安定な岩屑地に生育する。）のような極端な生育立地条件地に生育する種および景観構成に主要な種（特に、きれいな花が群落として一斉に開花し、春、夏、秋の季観を構成する植物）である。

山地の森林限界付近からハイマツ帯の崩壊礫地のようないわば植物にとって厳しい立地条件地に生育する印象の強いウラジロタデが、北海道東部の釧路・根室支庁管内で山地から

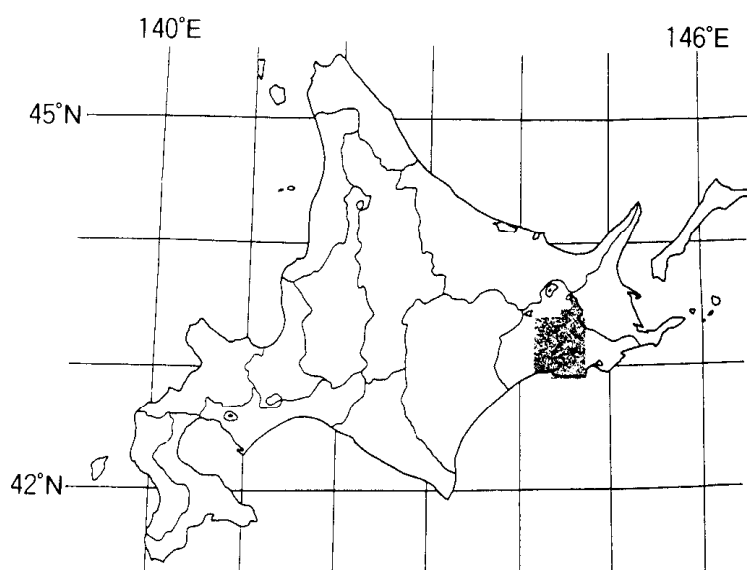
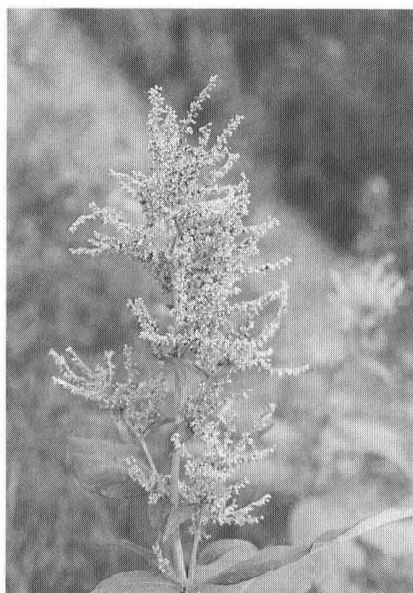


図-1 調査地位置図（砂目部分）

※釧路市立博物館 (Kushiro City Museum, Kushiro Hokkaido)



写真－1 雄花穂

低標高地まで生育している。しかしその分布は広く分散しているものではなくある偏りが見られた。そこでここでは釧路湿原周辺部での分布の状況について述べたい。

調査地と調査方法

釧路湿原周辺の植物相調査をおこなうなかで、数ヶ所のウラジロタデの生育地を確認した。それはすべて釧路湿原の東北側の道路付近であった。そこで釧路湿原周辺部の釧路市、鶴居村、釧路町、標茶町、(別海町、阿寒町の一部を含む)内の全国道、道々と普通乗用車での走行が可能な農道、林道等から、また山地は登山道から生育状況を調査した。調査地(図－1、2)は標高10m程度までの湿原を含む釧路湿原国立公園を中央部においた。北部の西別岳の標高799.8mを最高に南東方向にゆるやかに傾斜している。ほぼ標高300m以下のなだらかな地形である。

分布地は小群落が道路沿いに狭い間隔で帯状に分布する例もあり、地図上に表しにくい。そこで環境庁自然環境保全基礎調査メッシュを参考にして、あった場合は1kmメッシュごとに●印で図示した。なお図上で●印はメッシュの中心においたため、実際の分布地と

は多少のずれがある。

釧路での花期は7～8月である。そこで調査は草丈が十分に伸び、円すい形の花穂がついて道路からその有無が確認しやすい7～10月におこなった。

結果と考察

釧路・根室地域での植物相の記録が蓄積されるにつれ、釧路湿原がある種の植物の分布拡大にとって障壁となっている可能性や釧路湿原周辺で分布が欠けたり疎になっている植物のあることが明らかになってきた。

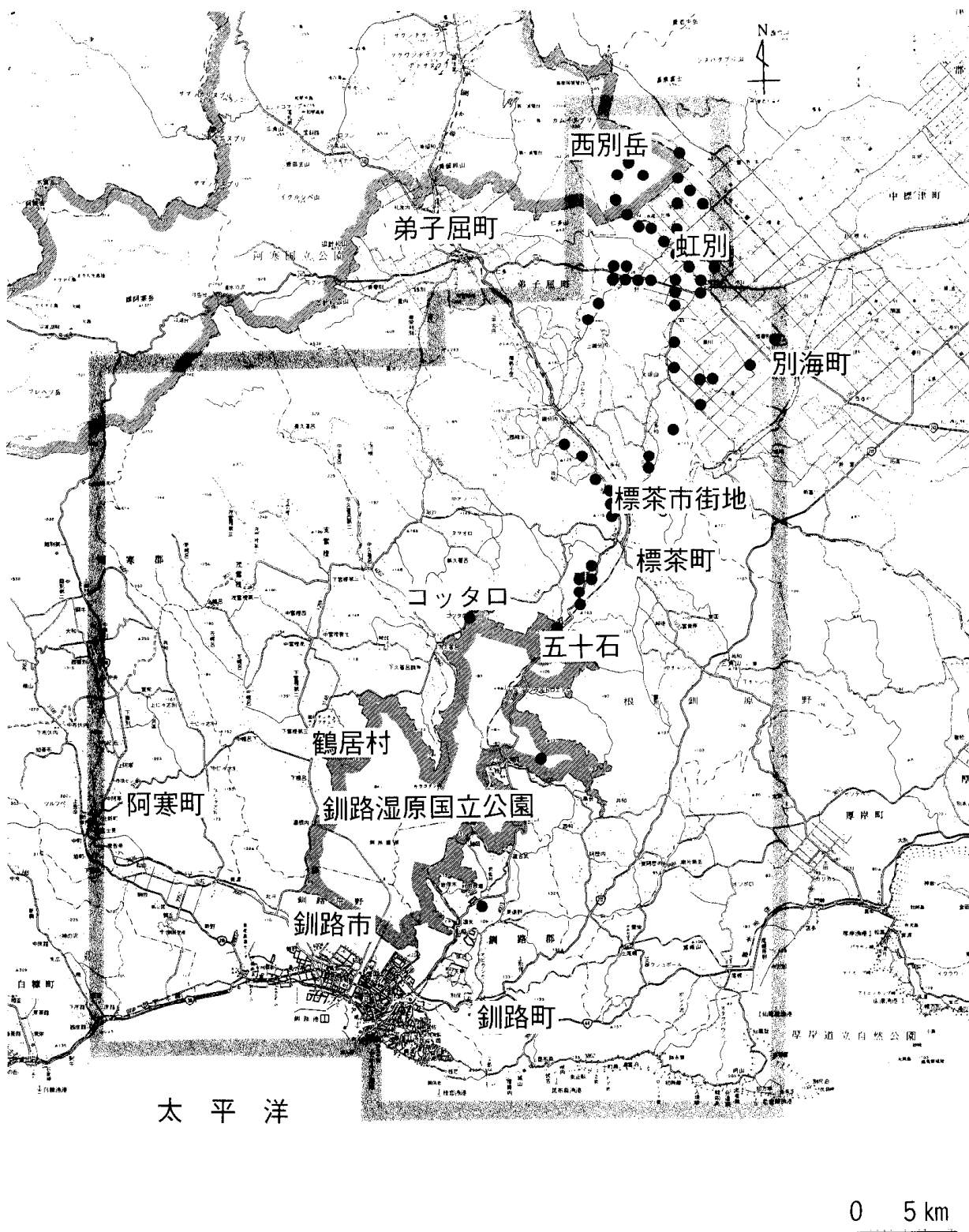
ウラジロタデは釧路湿原付近と西部では少なく、北～東部から根室市、別海町には道路沿いに広く認められる種である。

ウラジロタデは数本から数十本の地上茎がおもに道路ぎわかのり面下部にあり、道路から垂直方向に内奥部まで広がっている例はなかった。西別岳上部のものは草丈が低く30～40cm程度であり、道路沿いでは草丈は1m前後となっている。雌雄異株とされているが、まばらに結実のみられる雄花穂もかなりある。

湿原周辺での生育地はおもに標茶町の東北部にある。標茶町、西別岳山麓の虹別市街地北部の農道沿い(写真－2)、虹別を通り弟子屈町に向かう国道243号線沿い、虹別から標茶市街地に至る道々31号線沿い、標茶市街地から五十石にかけての国道391号線沿いに普



写真－2 西別岳山麓の生育地(草地境)



図ー2 ウラボタデの分布地（砂目帯内）



写真-3 コッタロ道路ぎわ生育地

通にある。そのほかではコッタロ（写真-3）、釧路川にかかる瀬文平橋付近、塘路湖北部の道路ぎわに小群落がある。釧路町トリトウシの国道391号線道路のり面にも1個所ある。釧路市、鶴居村では認められなかった。ただし今回の調査区内で分布を確認できなかった地域での見落としの可能性は否定できないが、分布地あるいは個体数は希であろう。

現時点でわかっている釧路湿原周辺部（おもに標高300m以下）でのウラジロタデの分布状況は、外来種で良くある例のように道路沿いにのみ生育する。このことから、この分布型のものは道路開削以前から分布していたものが道路沿いにだけ残存したとは考えにくく、道路開通あるいは改修以後分布を広げた可能性がある。種子の供給源に近いとみられる西別岳山麓の虹別以東では、1960年代からの総合農地開発事業によってつくられた新しい農道沿いでウラジロタデは群生する。しかし同じ年代の事業による湿原以西にある鶴居村では見られない。

調査区内での道路開削工事は江戸後期（1801年）以前には逆のほらずそれ以降のことである。虹別地区から標茶をへて五十石（五十石船の船着き場があったことから付けられた地名）に至る道は、明治中期まで釧路からオホーツク海沿岸の斜里へ向かう重要ルート

の一部であった。かつての道路がそのまま用いられているのではなく、大正中期にあらたに開通したが、ウラジロタデが道路沿いに密に分布する。また国道391号線や国道243号線は現在のこの地域での幹線道路であり、西別・虹別から幹線道路沿いに分布する傾向がある。

勇払原野では土壌の発達したハンノキ疎林内でウラジロタデの純群落が形成されているが、釧路地域ではまだこのような目撃例はなく、道路沿いで分布地付近の林内でも発見できなかった。そこで今後さらに調査区域を広げ新たな分布地の確認と現在の分布地での盛衰の両面から追跡したい。

まとめ

- ①釧路湿原周辺ではウラジロタデは湿原東北部の幹線道路沿いと西別岳山麓林道、農道沿いに密に分布する。
- ②分布地は道路沿いであり、調査区内では林内の分布例はまだみられない。
- ③今後調査地域の拡大と新たな分布地の発見、現在の分布地での群落の盛衰を継続して調査する意向である。

引用参考文献

- 環境庁自然保護局編1980：国立、国定公園特別地域内指定植物図鑑－北海道－
- 工藤 岳1992：ウラジロタデ．フィールドウォッチング⑧．北隆館
- 岡本省吾1956：京都大学農学部北海道演習林植物目録．京都大学演習林報告第25号。
- 森紫朗ほか1987：根室市の植物分布．根室市教育委員会。
- 西川恒雄ほか1992：釧路湿原の高等植物植物相と細胞地理学的研究．釧路湿原の生物社会と合理的利用に関する研究報告書（伊藤浩司編著）．北海道大学大学院環境科学研究科生態系管理学講座。
- 標茶町史編纂委員会（編）1985：標茶町史考（続編）。